

えんにちまいご

講談社の新しい童話

木島 始 作
朝倉 摂 絵



《著者紹介》

木島 始（きじま・はじめ）1928年、京都に生まれた。東京大学英文科卒業。子どもの本としては、絵本「やせたぶた」、童話「あそびあいてはおばあさん」、少年少女向けの小説では、「考えろ丹太!」「緑の部屋」などがある。そのほか、「イギリスのわらべうた」「ウォーレスはどこに」「ピーターのいす」など、英語からの翻訳が多い。1972年、詩集「もぐらのうた」で日本童謡協会第2回童謡賞を受賞。現在、法政大学第一教養部教授。東京在住。

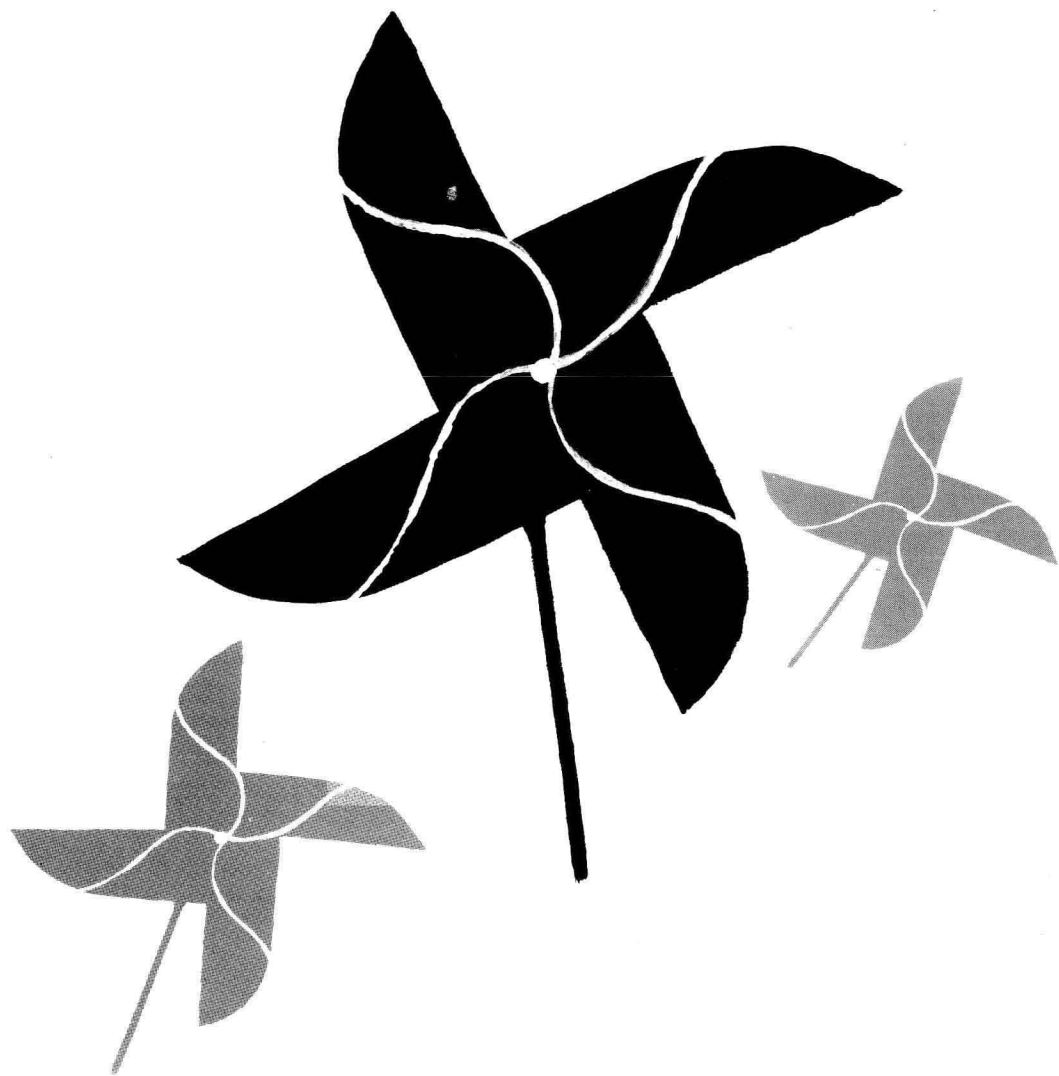
朝倉 摂（あさくら・せつ）1922年、彫塑家朝倉文夫氏の長女に生まれた。1951年、新制作協会日本画部会員となり、第3回上村松園賞を受賞。代表作は「黒人歌手ボール＝ロブスン」。絵本にも、「ゆきおんな」「ごんぎつね」ほか、多数の秀作がある。1968年、週刊朝日連載の「弥陀の舞」で講談社出版文化賞を受賞、1972年、絵本「スイッチョねこ」で講談社出版文化賞絵本部門賞を受賞した。現在、舞台美術協会会員・東京造形大学教授・桑沢デザイン研究所教授。東京在住。

えんにちまいご / 定価500円 / 昭和47年9月24日第1刷発行

作 木島 始 / 絵 朝倉 摂 / 発行者 野間省一 / 発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112 / 電話 東京(03)945-1111(大代表) / 振替口座 東京3930 / 印刷所 凸版印刷株式会社

©木島 始1972 / Printed in Japan 落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-215862-2253 (0) (児2)



木島 始 作
朝倉 撰 絵

えんにちまいご



お

えんにちまいご



だ い じ な や く そ く

シミズチヨウは、タツオとユミコの住^すんでいる町^{まち}です。とくにかわったものは、なにひとつありません。ふつうの町^{まち}です。学校^{がっこう}もあるし、ゆうびん局もあります。このごろは、うら通^{どお}りにも、ときどきダンプカーが来^きますが、車^{くるま}や人^{ひと}で大^{だい}こんざつすることなど、めったにありません。

シミズチヨウというのは、タツオとユミコのおとうさんの話^{はなし}だと、むかし、きれいな水^{みず}が地面^{じめん}の下^{した}からわいていたから、シミズという名^なまえがつけられたんだそうです。

にぎやかな町^{まち}の人^{ひと}から見^みると、シミズチヨウは、まるでいなかです。家^{いえ}がたくさんたってきて、畑^{はたけ}がずいぶん少^{すく}なくなりましたが、ときにはニワトリが、道^{みち}のまん中^{なか}を、二^{ふた}わも、三^{さん}ばもかけていくことがあります。

しかし、いなかや山^{やま}おくの人^{ひと}から見^みると、シミズチヨウは、やっぱり町^{まち}です。車^{くるま}が十台^{じゅうだい}もならんで、ブーブー、ブーブーと、うるさい音^{おと}を出^だしている

ことがあります。

おにいさんのタツオは四年生^{ねんせい}で、妹^{いもうと}のユミコは二年生^{ねんせい}です。たえず、口^{くち}げんかをしています。ほんとは、なかがいいのです。



ふたりとも、遠足^{えんそく}や運動会^{うんどうかい}や、それに、学芸会^{がくげいかい}も、すきです。ふたりとも、しゅくだいが、きらいです。ふたりとも、買い食^{かいく}いが、すきです。ふたりとも、はらまきをしてねるのが、きらいです。

ある日^ひ、ユミコは、学校^{がっこう}で友だち^{とも}のヤスコに、「えんにち、おもしろかったよう。」といわれました。

ユミコは、まだ、えんにちに行^いったことがないのです。

それから、二月^{ふたつき}たったのですが、



も、そのまえのときも、いいお天気^{てんき}で、きらきらお日^ひさまが、かがやいていたのでした。せっかくのえんにちの日^ひだのに、もうこれで何回^{なんかい}、えんにちに行けない日^ひが来た^きでしょう。

そう、二年生^{ねんせい}のユミコは、ひとりでえんにちへ行^いかせてもらえないのです。そして、いつも、おとうさんもおかあさんも、つづうが悪^{わる}く、おにいさんのタツオは、ひとりで遊び^{あそ}びに行^いってしまうのです。

でも、とうとう、ユミコのゆめが、ほんとうになる日^ひが来た^きのです。

まだ、ユミコは、えんにちに行^いったことがありません。ユミコは、まいばん、あすはえんにちに行^いきたいなあ、行^いきたいなあ、と思^{おも}ってねるのでした。

しかし、えんにちは、月^{つき}に二回^{にかい}しかありません。

えんにちの日^ひは、このまえのとき

さあ、きょうは、ユミコが待って
いたえんにちです。

おまけに、きょうは、土曜日なの
です。

こんな日は、めったにありませ
ん。二、三日まえ、カレンダーを見
ていたタツオが、土曜日には、夕飯
を食べてから、えんにちへつれて
行ってちょうだい、と大きな声でお
うさんにねだりました。

おとうさんは、あっさり、うん、
とやくそくしてくれたのです。

ですから、学校から帰って、にい
さんのタツオは四年生の、妹のユミ
コは二年生の勉強を、いつもより早



く、しっかりしました。

ところが、勉強べんきょうを終わおると、おかあさんが、おやつをくれてこーいいた。
た。

「おとうさんね、こないだ、やくそくしたでしょ。」

「うん、きょう、えんにちにつれてってくれるって。」

「よく、おぼえてるわね。」

「あたりまえだよ、わすれてたまるかい。」

「勉強べんきょうも、そのくらいよくおぼえてくれるといいんだけどね。」



「なんだよう。」

「あのね、きょう、おとうさん、おしごとで夜おそくなって……。」

「ちえっ、つまんねえな。これだから、おとなって、いやんなっちゃう。」

「なんです、タツオ、その口くちのきき方かたは。さいごまで聞きなさい。」

「はあい。」

「つまんなあい。」

と、それまでタツオにいさんの声こえを聞きいて、だまっていたユミコが、大おお声こえを上あげました。



「ユミコちゃんもいっしょに、よくお聞き。だからね、おとうさんかえ帰りがおそいから、ふたりにおこづかいあげるから、ふたりで行いつといでつて。えんにち、行いけるでしょ。」

「そりゃ、行いけることは行いけるけどさ。ユミコなんかつれてくんじゃ、

めいわくだよ。」

「わたしも、おにいちゃんとじゃ、いや。」

「じゃ、やめなさい。おこづかいもあげないから。」

タツオもユミコも、がっかりしました。それで、考かんがえなおして、ふたりでえんにちに行いく気になりました。

「おこづかいって、いくらなの？」

「タツちゃんには二百円ひゃくえん、ユミちゃんには百円ひゃくえん。ね、これだけ。」
「けちだな。」

タツオ

200+100

ユミコ

100+100



「けち、けち。」

ユミコが、おにいさんの口まねをして、ふたりで、おかあさんのおなかや

おしりをたたきました。

「やくそく、やぶったんだから、

もつとくれよ。」

「そうよ、そうよ。」

おかあさんは、とてもこまってしまいました。たしかに、おとうさんはやくそくをしたのです。そして、おとうさんがしごとでいそがしいのもたしかなのです。

「じゃあね、おとうさんにないしょよ。二百円ひゃくえんだけあげるからね。ふたりで分わけなさい。ほら、ユミちゃん、二百円ひゃくえんふたりで分わけると、いく

らずっ?。」

「百円ひゃくえんじゃないか。」

「あら、タツちゃん、あんたに聞いたんじゃないですよ。」

「百円ひゃくえんじゃ、つまんない。」

「つまんない。」

おかあさんは、だまって、顔かおを横よこにふりました。しかし、こんどは、タツオもユミコも、大きな声こえでねだったりしませんでした。なんだか、おかあさんがなきそうな顔かおをしたからです。

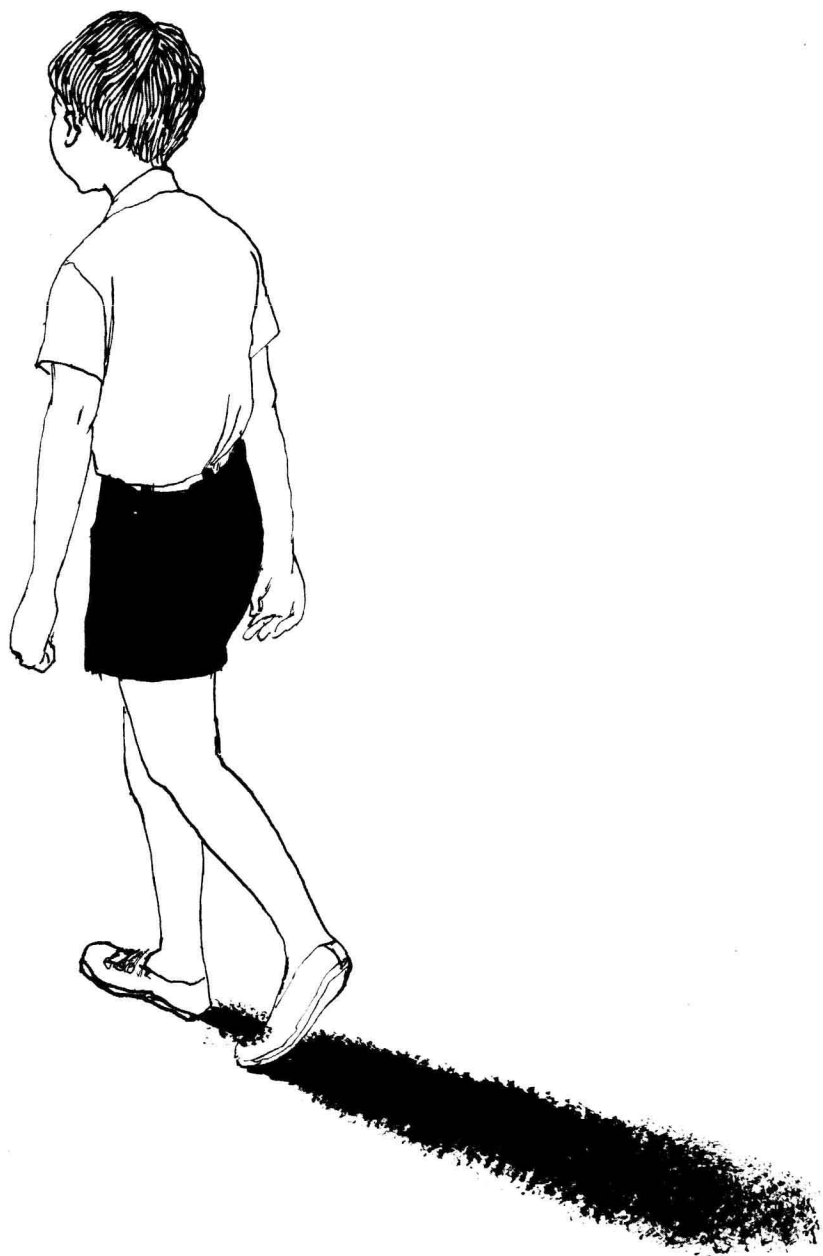
「じゃ、いいよ。」

ユミコも、もうそれいじょうのおこづかいをねだるのをやめました。ユミコは二年生ねんせいですから、百円ひゃくえんたす百円ひゃくえんの二百円ひゃくえんというおこづかいは、いつもよりずっと多いのです。

「さあ、しっかりさいふに入れて、落とさないでね。」

「はあい。」

ユミコは、元気げんきよく返事へんじしました。



たして二百円ひゃくえんもらうことになったタツオは、ユミコのちびが二百円ひゃくえんじゃ、ちよっともらいすぎだなと思いました。

さあ、そこでえんにちへ行くとしゅう、タツオは、何回なんかいもユミコから、おこづかいをよけいに、三十円えんでも、五十円えんでももらおうと苦心くしんしていいました。

「ユミちゃん、おこづかい、いくらもらったの？」

「二百円ひゃくえんよ。」

ユミコは、タツオが、「ユミちゃん」なんていうので、おかしくなりました。いつもは、「ユミコ」とよびつけにするのです。それに、じぶんのおこづかいが、二百円ひゃくえんになったということは、二年生ねんせいでも計算けいさんできていたのです。うっかり、いつもと同じおなと思って百円ひゃくえんといたら、きょうとくべつ、おあさんがくれた百円ひゃくえんを、タツオにみんな取とられてしまいます。

タツオは、ユミコの答えこたを聞きいて、しぶい顔かおをしました。

ふたりは、車くるまの多い大通りおおどおをさけ、うら道みちを通とおっていきました。

「えんにちは、五時ごじごろからだよ。」

「うん。」

「まだ始まらないから、ヒカワジンジャのほうに行ってみようか。」

「なににいい？」

「あそこで、カブトムシとったことあるんだ。虫かご買って入れといたら、おもしろいぞ。スイカなんか食べるんだよ。」

「ほんとに、とれる？」

「行ってみなきゃ、わかんないよ。」

ユミコは、あまりヒカワジンジャに行くのは、さんせいではありませんでした。えんにちのところから、すこし遠すぎるからです。タツオは、ひとりで、さっさと歩いていきます。